（様式課程博士３）

学　位　論　文　の　要　旨

専　攻　名	環境工学	ふりがな 氏　　名	きり はら　まい こ 切原　舞子
学位論文題目	現代における住宅計画のための室要求構造の解明に関する研究 A Research of Relations Between Plan-Types and Function for Contemporary House Planning		

戦後の住宅計画論は、住宅難解消と住生活向上に大いに貢献したとはいえ、専ら標準世帯を対象とした公的な型別供給の後を受けた民間主導の住宅の平面構成は、先行研究によればむしろ画一化が指摘される。住環境を構成する社会構造は大きく変化し、居住者のライフスタイルも個別化が進む状況において、わが国の住宅の発展過程を裏付けた上で、現代における生活の多様性を許容する新たな計画論の創出が求められる。その主な着眼点は、下記の２項目である。

・共用空間の分析：伝統的には接客空間としての存在基盤を持ち、床の間のもつ格式性から存在を否定される時代もあった座敷は、独立住宅においては厳然と継承され続け、一般的にはリビングルーム（以下、L）での来客の応対が主流となった現代においてもなお、高いニーズが認められる。L との関係性も考慮しながら、現代における座敷の存在意義を探ることが、潜在化している住要求の解明へとつながると考える。

・私的領域の分析：公・私室分離実現後の住戸内の私的領域に対する住まい手らの関心は、子ども室の確保に向けられ、建築計画学分野もこれにもれず、ゆえに家族の核ともいえる夫婦の領域については子との関係性に終始している。欧米とは異なるといわれるわが国の夫婦観の背景には、儒教倫理に基づく男女区分があり、かねてから指摘される夫婦別室就寝の要因の１つでもあろう。しかしながら、昨今の夫婦別室就寝へのニーズと高い関心の要因は別にあると思われ、夫婦本位の側面からの計画理論も必要である。

以上を受け、本研究では接客、および夫婦の住戸内生活領域に着目し、住要求を多面的にとらえ、住宅計画理論の再構築を行うための要件を明らかにしようとするものである。具体的には、座敷や LDK の共用空間と、主に寝室を中心とした私的領域について、平面構成と用途それぞれの現状と希望の整合性（一致・不一致）をとらえ、この要因を両者の関係から考察するという手法をとっており、研究の課題は次のとおりである。

（注）和文 2,000 字又は英文 800 語以内　　続紙　有☑　無□

・座敷に対する住まい手の志向を、空間・用途の双方からとらえ、現代における座敷の存在意義を明らかにする。 —Ⅱ章

・夫婦の領域、および寝室の位置づけと決定要因を示し、これに対する希望との関係性から、現状の問題点を指摘し、夫婦の住戸内生活領域の計画課題を示す。 —Ⅲ章

以上を明らかにすべく、北海道から九州全国9地域の主要都市の分譲戸建て住宅団地においてアンケート調査を実施し、1階にLDK以外に座敷・和室を備えた2階建て住宅についての有効票369件を得た。本論文はこのデータを基に行った分析・考察の結果を示すものである。

Ⅰ章では、わが国の独立住宅の歴史的・社会的背景を概括し、既往研究、および本研究が基礎におく先行研究との関係から、本研究の意義について論じている。

Ⅱ章では、座敷とLDKの平面構成の実態と希望の整合性、およびその要因を用途の実態・希望やライフステージとの関係性から、

・座敷の温存志向は根強いが、平面構成では、最も普及度の高いプランでの実態と希望の乖離（不一致）が甚大であり、座敷の分離・拡大志向が顕著である

・用途の上では家事や子育の他、家族の就寝や夫婦のくつろぎの場としても使用、希望もあるなど、座敷の家族領域化が進行しており、これと依然根強い接客利用希望との重合が、先の分離・拡大志向につながるが、同時に住戸内生活における社交性の低下も指摘できる

ことを明らかにし、現代における座敷の存在基盤として、ⅰ家族空間の拡充、ⅱ接客空間温存　の両義的な要素が並存していることを示した。

Ⅲ章では、夫婦寝室、および「居場所」のとられ方と、これに対する希望との関係性から、

・夫婦別室就寝の契機は、子との同室就寝の他、子育てを終えた後新たに自律的時間欲求から別室就寝を始める例もみられ、また子育て期の妻の安眠欲求も高く、全体では夫婦ともに同室就寝を希望し、実際に同室就寝を行う例は1／3にとどまる

・夫・妻各々の「居場所」は、主に2階にとられる寝室よりもLに多く、Lの私的領域性の高さが認められるが、これは夫婦の就寝形態の不安定さや寝室の狭小性が要因にある

ことを示した。

総括としてⅣ章では、各章での知見はタタミという日本住宅固有の床面様式に起因した室機能の転用性に要因があり、このフレキシビリティを利用した接客行動を含めた、家族（夫婦）生活についての計画モデルとして次を提示している。

・共用空間：座敷とLにみられる、家族（特に夫婦）の日常生活を豊かに展開したい要求と、依然根強い接客意識という背反する要求を満たすために、L とは分離、あるいは間に干渉空間を備えた座敷を確保することで、座敷の転用性を高める。

・私的領域：主に寝室となる2階室は、個人的行為も許容できる広さで確保し、夫婦別寝や1階室就寝への志向を満たすためには、先の座敷がこれを許容する。

（様式課程博士８）

学位論文審査結果の要旨

専　　攻	環境工学　　専攻	氏　　名	切原　舞子
論　文　題　目	現代における住宅計画のための室要求構造の解明に関する研究		
主　　査	大鶴　　徹		
審　査　委　員	佐藤　誠治		
審　査　委　員	真鍋　正規		
審　査　委　員	小林　祐司		
審　査　委　員	鈴木　義弘		

審査結果の要旨（1000 字以内）

本論文は、わが国の住宅平面構成の史的発展過程の充分な認識に基づいた上で、伝統的には接客空間としての存在基盤を持つ座敷、および、家族共用空間の変容、あるいは、夫婦の私生活的潜在要求などについて、現代における居住者の室要求構造という観点から多面的にとらえ、住宅計画理論の再構築を行うための要件を明らかにしている。

まず１章の序論において、研究の背景、既往研究における到達点と課題、および、研究の目的と方法について述べている。

続く２章は、現代における座敷の存在意義についての分析であり、独立住宅における座敷と LDK の平面構成の希望と実態の整合性とその要因を、用途の実態・希望やライフステージとの関係から、接客行動の減少に伴う住戸内生活における社交性が低下しており、伝統的には接客空間として位置づけられてきた座敷の家族生活空間化していることを明らかにしている。

３章では、夫婦の住戸内生活領域に着目した計画課題についての分析・考察が行われており、家族成員、とりわけ、夫婦の私的生活領域が極めて不安定であることを実証し、その要因には、畳という日本住宅固有の床面様式に起因した室機能の転用性が挙げられることを指摘している。

これらを総括した４章においてまず、現代における座敷の存在基盤は、ｉ家族空間の拡充 と ii 接客空間温存の両義的な要素が併存し、これが混乱をも招くことを指摘した。これらの住要求を明確化すれば、伝統的な座敷という空間構成要素に現代的な有用性を見出すことができ、ひいては、私と共の区分原理が不明快なままでの LDK 空間拡充が指摘できる。すなわち４章では、私的領域拡充だけでは実現しない家族生活（特に夫婦生活領域）が豊かに展開する可能性があることに言及し、この室機能の転用性を利用した接客行動を含めた家族共用空間および私的空間の計画のための要件と、住宅の社会性低下を克服するための方向性が提示されている。

以上のように、本論文は戦後の住生活の変容という重要な研究課題に正面から取り組んだ意欲的かつ発展の可能性を含んだ内容として高く評価でき、これからの住宅計画を構想する上での示唆に富むものでもある。

論文公聴会において、研究内容に関する簡明な説明があり，質疑応答でも的確な回答がなされた。また、最終試験も優秀な成績であり、以上から、審査委員会では全員一致して本論文は博士（工学）の学位に相当すると判定した。